

2023年11月26日（日）収穫感謝祭主日朝礼拝説教

『献げ物の意味』井上隆晶牧師

創世記4章1～12節、詩編65篇9～14節

①【なぜ神はカインの献げものを受け入れられなかったのか】

カインとアベルという兄弟がいました。カインは農夫になり、アベルは羊飼いになりました。時がたって二人は神様に献げ物をもってきました。カインは土の実りを、アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持ってきました。神はアベルとその献げ物に目を留めましたが、カインとその献げ物には目を留められませんでした。なぜ神様はカインの献げ物を受け入れなかったのでしょうか。「カインは激しく怒って顔を伏せた」（4：5）とあります。この激しい怒りは「自分は絶対に正しい、それなのになぜこんな扱いを受けるのか」という思いから来たものでしょう。カインには自信があったと思うのです。でも自分の力で生きる者は自分を誇り、自分が認められないと怒ります。カインには罪の意識も神に対する感謝もありません。自分を絶対に正しい者として神の前に出たのです。それゆえ神は彼とその献げ物を受け入れませんでした。一方アベルが肥えた初子という最上のものを献げた事は、自分は神によって生かされているという信仰の現れであり、神に対する感謝の現れでしょう。アベルは自分の罪を知っており、神の前に出るためには犠牲が必要であることを知っていたのです。それゆえ彼はもっとも善いものを献げたのです。この肥えた初子はキリストのひな形です。自分は正しいという思いで献げ物をして神は受け入れられません。神が受け入れるのは砕かれた心です。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。」（詩編51：19）です。

②【世界は食べ物であること】

聖書では、この世はすべて人間への食べ物として表現されています。創世記1章では、神は人に「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物になる。」（1：29）と言われ、ノアの洪水の後には「動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。」（9：3）と言われ、肉食が許されました。こうして植物と動物は人間に食べ物として神から与えられました。この世は神のイメージであり、神はこの世（動植物）を通して私たちにご自分の命をくださり、私たちと交わろうとします。すべての命は神から出ているのです。存在するすべてのものは神から人への贈り物（プレゼント）です。私たちは贈り物をもらう時、それを通して相手の愛を知り、思いを知り、感謝します。そして前よりいっそう相手に対する信頼関係を深くしてゆきます。それと同じように、私たちがこの世の物を食べる時には、それを通して神を知り、神との交わりを深くし、信頼を深くしてゆかなければならないのです。

③【人間は祭司である】

人間も動物もいつも同じように飢えています。人間と動物の違うところは、神からいただいた食べ物といのちを賛美し、感謝することが人間にはできるということです。犬は賛美をせず、食前の感謝の祈りをしません。私の実家では食事の前に「祈り」をしません。各自が食卓に着くと、すぐにガツガツと食べ始めます。まるで動物のようです。私も子どもの頃、そのようにしていたのです。でも教会に来て祈ること、賛美することを覚えました。人間とは第一に讃美する者なのです。詩編の中にも「主を賛美するために民は創造された。」(詩編 102 : 19) と書かれています。人はこの世と神の間に立ち、神からいただいた命とこの世を感謝して神を賛美し、いただいた物の一部を代表として神に献げ、再び神から祝福されたこの世の物をいただくという祭司の役目をするのです。しかし現代人はこの祭司の能力を失ってしまいました。人はこの世の物を手に入れると、神からの贈り物とは考えず、自分の力で得たかのように考えます。故に感謝するというのをしないのです。墮落とは、神を抜きにしてこの世のすべてを見るようになるということです。神を目的として生きるのではなく、この世の物を目的として生きるようになることです。神との交わりを失い、この世の物との交わりだけをするのです。故にすべてのものを回復させなければなりません。すべてに神を入れて行かなければなりません。修道士がすべてのものに十字を描くのもそういう意味です。

④【ユーカリスチア・感謝を取り戻すところが礼拝である】

失われた祭司の仕事を、私たちは礼拝の聖餐式で取り戻すのです。聖餐の事を教会は「ユーカリスチア」と呼びました。ギリシャ語で「感謝」という意味です。食べ物の中から選ばれたパンとぶどう酒を祭壇に献げ、感謝の祈りを唱え、聖別してもらい、再びそれを受けて食べるのです。献げると同時に、食べるのです。この両方が大切です。このパンとぶどう酒はキリスト自身を象徴します。彼は最後まで神に従順であり、私たちを生かすために、自分の命を献げられました。キリストこそ、この世が神に献げられる唯一の聖なる献げ物、「感謝」なのです。それはまた神が私たちに与えて下さった最高の贈り物であり、私たちはこれを食べて本当に生きるのです。私たちは聖餐を食べるたびに、神が私たちにしてくださったことを思い出して感謝し、神の愛を知り、神への信頼を深くするのです。そして最後に私たちも、この世界と自分自身を神に献げるのです。キリストを真似てです。

この世の食べ物が祝福されて、本当に人を生かす食べ物となるように、自分の人生や命を神に献げ、神の目的のために用いることによって、その人の命は祝福された命となり、多くの人を生かす本当の命となるのです。それゆえ聖パウロはこのように語るのです。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」(ローマ 12 : 1) 神に献げられた命こそ祝福された命です。

●三浦綾子さんの小説「塩狩峠」というのがあります。カリエスで3年も寝ている

ふじ子さんと恋人の永野信夫さんは婚約をしますが、結納の日に永野信夫さんは鉄道事故で命を落とします。列車が塩狩峠にさしかかった時、後ろに機関車がついていなかったの、峠の途中で列車は止まってしまい、そのまま後ずさりをし始めたのです。見る間に客車は加速度を増し車内に恐怖が走ります。鉄道員であった信夫さんはとっさにデッキに出てハンドブレーキを回すと、速度が落ちますがまだ止まりません。50メートル先には急こう配のカーブがあります。列車が止まらなければ曲がり切れず列車は転覆し大勢の人が亡くなるでしょう。そこで彼は祈り決断します。信夫さんは自分の体を線路に投げ出し、列車は彼の体に乗上げて止まりました。こうして彼は自らの命を投げうって乗客を救いました。最後の場面で、ふじ子さんが、信夫さんが亡くなった事故現場に花をたむけに出かけます。そこで信夫さんのお母さんの手紙を読まれます。「ふじ子さん、信夫の死は母として悲しゅうございます。けれどもまた、こんなにうれしいことはございません。この世の人はやがて誰も彼も死んで参ります。しかしその多くの死の中で、信夫の死ほど祝福された死は、少ないのではないのでしょうか。…」信夫さんの言葉がふじ子さんの心に浮かびます。「僕は毎日を神と人のために生きたいと思う。」この小説は、ほぼ実話です。明治42年2月28日に、旭川六条教会員であり、鉄道員であった長野政雄さんが人命救助のため殉職の死を遂げました。このことに多くの人が感動しクリスチャンになったそうです。

自分の命を他者のために献げる生き方ほど尊いものはありません。それによって他者を生かすのですから。そのとき私たちの命が本当の命に聖変化するのです。

●アッシジのフランチェスコの平和の祈りの後半部分を思い出します。

「主よ、わたしを平和の器とならせてください。憎しみがあるところに愛を、争いがあるところに赦しを、分裂があるところに一致を、疑いのあるところに信仰を、誤りがあるところに真理を、絶望があるところに希望を、闇あるところに光を、悲しみあるところに喜びを。ああ、主よ、慰められるよりも慰める者としてください。理解されるよりも理解する者に、愛されるよりも愛する者に。それは、わたしたちが、自ら与えることによって受け、許すことによって赦され、自分のからだをささげて死ぬことによってとこしえの命を得ることができるからです。」

この世の人は自分が人生でどれだけのを手に入れられたか、どれだけ集めたかで豊かな人生だったかどうかを測ろうとしています。しかしキリスト教では自分が人生でどれだけのを人に与えて来たか、どれだけ自分を献げてきたかで測るのです。人生とは受けるものではなく献げるものなのです。そして自分自身の命を献げるほど豊かなものはないのです。その為に礼拝で私たちは自分を神に献げ、用いってもらうのです。これこそまことの礼拝です。